



日野原重明記念

「新老人の会」東京 会報

Keep on going!

Vol.7/No.4

2025.10

「戦」の「後」であり続けるために

日野原重明記念 鹿児島「新老人の会」世話人代表
国立病院機構九州循環器病センター名誉院長

鹿児島 友義



『戦い』の「後」であり続けるために』とは、十年前、戦後七十年の節目の元旦の新聞に掲載された岩波書店の全面広告の見出しである。強い印象を受けてその年の夏、『鹿児島県医師会報』にエッセイを投稿した。八十年の節目に東京の「新老人の会」から原稿を依頼されたが、私自身、大変に刺激された広告であったので、同じような内容になることをお断りしておきたい。

『戦』の「後」であり続けるために』という大きな見出しの下には、お二方の短いエッセイが添えられていた。

ジョン・W・ダワーは、『敗北を抱きしめて』、『転換期の日本

へ』『吉田茂とその時代』等の著書（ともに日本語がある）で知られるアメリカのすぐれた日本現代史研究者である。沖縄、中国、蘭領・仏領インドシナ、フィリピン、そして日本本土で、戦闘員と戦闘員を超える民間人の推定死者数をそれぞれ具体的な数字を挙げて、この節目のときに、二つの側面を厳粛に受けとめて大切にしたいと述べておられる。一つは自分たちだけでなく、他者の苦難と犠牲を思うこと（わが国が加害者でもあったことも）、そして戦後の日本にしっかり根づいていく、平和とより良い世界を望む理想主義についてである。

大江健三郎は、東京大学仏文科

で教えを受けた渡辺一夫の著書『狂気について』から、『狂気なしでは偉大な事業はなしとげられない、と申す人がおられます。それはうそです。狂気によってなされた事業は、必ず荒唐と犠牲を伴います。真に偉大な事業は、狂気に捕らえられやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間に

よって、誠実に執拗に地道になされるものです」という言葉を引用している。ともに私たちがいつまでも戦争をしない、戦争に巻き込まれないためにどうあるべきかの知恵を説いている言葉として印象深く読ませていただいた。

また、同じ日の新聞に紹介された、先の（当時の）天皇、皇后陛下の御歌も、やはり戦争の悲しみと平和を願う気持ちを詠まれたものだった。

天皇陛下の御歌は、

「来たる年が原子爆弾より七十年経つを思ひて」の詞書をそえて

爆心地の碑に白菊を供へたり

忘れざらめや往にし彼の日を

皇后さまも、

我もまた近き^{よはひ}齡にありしかば

沁^{しみ}みて悲しく対馬丸思ふ

と詠まれている。

ともに戦争の悲しみと平和への思いを訴えられた両陛下の御歌で、ともに心打たれ、感動を抱きつつ拝読させていただいたことを思い出す。

十年前のこの年、「新老人の会」鹿児島支部では恒例の日野原先生の講演会を、平和の町として知覧特攻平和会館を維持し、若者による平和スピーチ・コンテストを実施している知覧で開催した。先生には空港からかなり遠くまで車でお越しいただき申し訳なかったが、平和の町で開催できたこと、先生に知覧特攻平和会館を見ていただけたことをうれしく思った。

日野原先生は「平和と命の大切さを子供たちに伝える」ことを私たちに託された。戦後八十年となつて、戦争の体験者も少なくなり、ジョン・W・ダワーの言う、しっかりとした平和とより良い世界を望む理想主義も怪しくなりかねない。平和への思いは渡辺一夫が言うように、誠実に、執拗に地道になされなければならないものである。

日野原先生が私たちに託された平和への思いを現実のものとするために「新老人運動」の一層の普及を祈るや切である。

鹿児島 友義 プロフィール

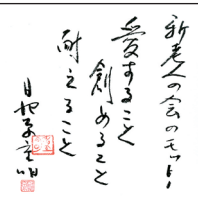
鹿児島いのちの電話協会理事長

日本キリスト教団

鹿児島キリスト教センター館長

鹿児島市医師会顧問（元会長）

戦後八十年の節目に思う



被爆八十年

私の見たキノコ雲と、
秘められた家族の記憶

梶川 博（東京 八十六歳）



昭和二十年八月六日午前八時十五分、私は爆心地から約十八キロメートル南の佐伯郡沖村（現在の江田島市）に住む小学一年生でした。登校中にピカッと光った後、大きな音が響き、すぐに下校を指示されました。帰り道、空には恐ろしい勢いで天を突き上げる巨大な「キノコ雲」が立ち昇っているのを目撃しました。

私の長姉・悦子（当時十三歳）は、広島市内の女学校に通っており、爆心地から北東に三キロメートル余り離れたアヤ子叔母の家に身を寄せていました。この朝、姉は栄養不良と過労から体調が悪く、勤労奉仕をためらっていた。

ました。叔母は当時の「奉公第一」という規範に従い、姉を諭して送り出しました。姉は学校（爆心地から南東へ約一・三キロメートル）に向かいましたが、その日以来、帰ることはありませんでした。

臨月だった叔母は、連日焼け跡を捜し回りましたが、姉の被爆場所や行方は今も不明のままです。戦後、社会の価値観が変わると、叔母は姉を送り出したことを深く後悔し、自らを責め続けました。時折、当時のことを小声で話すこともありましたが、深い嘆きとともに「もう言うまい」と話を途切れさせていました。

叔母は九月十二日に男児を出産しました。この従弟は胎内被爆者です。彼は、小学生の頃から放射線影響研究所（ABC）の定期健診を嫌がり、長じて医師になってもそれは変わりませんでした。「被爆者であることを知られたくないし、思いたくないんよ」と漏らしていました。傍目には健康そのものに見えましたが、六十五歳半ばで進行大腸がんを患い、三年後に亡くなりました。

当時、父は軍医、母は教員としてそれぞれ出征中と赴任中でした。姉が亡

くなる一カ月前、一時帰省した姉を、祖母と次姉と私が波止場で見送ったことが忘れられません。船が離れても、姉はいつまでも振り返っては手を振っていました。

八十年前のキノコ雲と、現在の瀬戸内の穏やかな光景。この相反する二つの映像が、今も私の脳裏に浮かびます。叔母、長姉、従弟、三人三様の人生でした。中でも叔母は、二人の生きざまに深く関わりながら長生きをしただけに、そのつらさはひとしおだったと思います。

毎年八月六日には、「動員学徒等原爆死没者追悼式」（平和記念公園）に参加し、心静かな一日を送っています。

『過去を思い出せない者は、それを繰り返す運命にある。』

—ジョージ・サンタヤーナ

四歳で知った

原子爆弾の怖ろしさ

杉本 サクヨ（東京 八十四歳）



お盆前の中でも暑い昼前、原子爆弾が長崎の空で炸裂しました。投下され

たのは、プルトニウム爆弾「ファットマン」です。

テニアンから小倉へ向かって飛んできた爆撃機は、厚い雲に覆われた小倉に投下することができず、次の目標地、長崎へ向かいました。あいにく小倉と同様、雲にはばまれて投下を断念しかけたとき、ほんの少し雲のすき間が現れ、街が見えたのです。投下マンは、とっさにボタンを押し、この一発の原子爆弾で長崎市民七万三〇〇〇人（人口の約三分の一）の人々が一瞬にして熱線で焼かれ、無惨な姿で亡くなっていたのでした。

爆心地の浦上から山を隔て七、八キロ離れたところに住んでいた私は、その日、庭先の野菜畑で草とりをする姉のかたわらで遊んでいましたが、突然、不気味な閃光が走り、同時に押しつぶされんばかりの衝撃に襲われました。家の方で大きな悲鳴があがり、上の姉が防空壕の角に大股で鳥のように飛んで行くのが目に入りました。私も恐怖にかられ本能的に姉にがっかりしがみついていた。

その後、なんの情報もありませんでした。暑くるしい午後の数時間を屋内でやりすごし夕方外へ出ると、空から雪が降るように白い灰が舞いおりていました。子どもたちは、落ちてくる灰を手を受けて、日没まで遊んだのでした。

次の日、爆心地に暮らしていた親族の八人が無傷で我が家に避難してきま

した。堅固な防空壕に守られて幸運だったと運の良さをみんなで喜んだのでした。ところが次々と具合が悪くなり一週間そこで全員亡くなってしまうのです。何と、恐ろしい、おぞましい爆弾だと大人はふるえていました。この時、私は四歳でした。

今日まで不思議に思うのは、小学低学年の頃の記憶は全くないのに、原爆のことは鮮明に覚えていることです。

投下から二十年後、私はインドで国際協力に携わる任務で渡印。それ以来、半世紀、インドの子どもたちの教育や地域開発に専念していました。その間にも、あのおぞましい殺傷能力を持つ核兵器を、アメリカやソビエト（ロシア）、その他多くの国々が競って開発してきました。許し難いことです。ですが、核の恐ろしさを体験していないが、私は世界平和や核兵器等について深く考えてきませんでした。

そして今、悪魔に取り憑かれた世界のリーダーが、他国へ侵攻し、破壊と殺戮を悠然とくり返しています。ときどき核で脅しながら。

一方ガザでは食料を受け取りに集まった人々に爆弾を打ち込むという非人間的な行為を、すまし顔でやってのけているのです。

世の中はどこに向かっているのだろう、と不安になることもあります。でもどんなに厳しい時代になっても決して諦めず、核なき平和の希求を止めてはならないと思います。

初心者のためのスマホ講座⑩

～スマホ詐欺、だまされないための5つのコツ～

デジタル庁デジタル推進委員
伴 克子（東京会員 福岡在住）



みなさん、こんにちは。デジタル推進委員の伴 克子です。早いもので、この連載も10回目になりました。今回のテーマは『スマホ詐欺、だまされないための5つのコツ』です。スマホって便利！だけど、シニア世代をねらった詐欺のメッセージや電話が増えているのも事実です。「話をちゃんと聞く」「人を信じる」「コツコツ貯金している」…そんなシニアの良さが、悪い人に狙われる一つの要因となっています。知っているだけで、防げる詐欺があります。安心してスマホを使うために、少しの知識がとても大切です。

さあ～今日からできる5つのコツをご紹介します！

①「急いで！」って言われたら、まず数をかぞえましょう。「い～ち、に～、さ～ん」

「今すぐ！」「限定です！」なんて言葉は要注意ですね。慌ててリンクを押さずに、まず落ち着きましょう。「荷物の再配達」や「アカウントに不正アクセス」などのSMSも、本物そっくりの詐欺かもしれません。まずは疑う！世知辛い世の中ですが、それも詐欺から身を守るためですね。

② ひとりで決めずに、まず誰かに話そう

「ちょっと変かも？」と思ったら、すぐ家族や信頼できる人に相談を。

困ったときはこちらへ連絡

▶ 消費者ホットライン【188（いやや！）】

▶ 警察相談【#9110】

自分だけで解決しなくても大丈夫！まずは相談しましょう。

③ お金や個人情報の話は、特に慎重に

銀行や役所は、IDや暗証番号を聞くことはありません。聞かれたら電話を切る！そんな勇気も出しましょう。

④ スマホの“安全設定”を整える

- アプリやOSは常に最新に更新
- アプリは公式ストアからだけ入れる（App StoreやGoogle Play）
- 使わないアプリは削除
- LINEは「ログイン許可オフ」「友だち自動追加オフ」に

⑤ 毎日ちょっとスマホ（超初心者さん向け）

怖がらずにLINEで「おはよう」と家族や友だちに送る。天気をチェックする。ニュースを見る。それだけでも「慣れ」が増えて安心につながります。

最近の詐欺について

昨年1年間で、特殊詐欺の被害総額は720億円。しかも、そのうちの65%以上が65歳以上のシニアの方でした（2024年 警察庁統計）。

- 「不正アクセスがありました」などのSMS詐欺
- LINEで知人を装ったなりすまし詐欺
- SNSを通じた偽投資や恋愛詐欺

スマホを使うこと。詐欺に遭うことを怖がるより、知って・慣れて・相談できる関係をつくっておくことが何より安心です。

合言葉は「なんか変だな」と思ったら、すぐにストップ！！

初めての句会

飛鳥 蘭

「初めての句会」サークルでは月一回、ロの字に机を囲んで、兼題二句、当季雑詠二句合わせて四句提出。基本的なスタイルの句会ですが、勉強会でもあるので、お互いの句の選評にかなりの時間をかけています。今回は、その選評の一部を紹介いたします。

● 里の子の畦道を行く夏祭 夢子

A…里の子の案内で、氏神さまの社まで慣れない畦道を行く作者、だんだんと祭囃子が聞こえて来るかも。

B…そんなには悪くないですが報告の域を出ていないのでは。

● 嬰兒の夜泣きの愛し夏の星 緑

A…夜泣きすら愛おしいと思える愛情たっぷりなご家庭の様子が窺えます。

B…夜泣きを愛しいと思えるのは、ジババの作だからかと思えます。夜泣きなので、季語は「星」ではない方がいいし、夜泣きするのは嬰兒に決まっているので、嬰兒も省けます。

● 富士山頂霧立ち込める開山祭 寛子
講師・霧、開山祭も季語ですが、この句の季語は開山祭、つまり山開きです。富士山の山開きは麓の浅間社で行われます。この句では、中七の霧立ちこめる、が山頂なのか、開山祭なのか分かります。以下講師の添削です。

山開き富士山頂は霧の中
○ 投句について

当季雑詠 二句 いつでも可

メール投句 viridia@icloud.com 水戸緑まで
葉書投句 〒168-0064 杉並区

永福4-28-24 飛鳥蘭宛
問合せ先 03-3265-1909

日野原重明記念「新老人の会」 全国連絡会・東京集会

日時：2025年11月22日(土) 13:00～

会場：ホテル・ルポール麹町3階

プログラム：

①講演：早乙女愛氏（映像編集者）

戦後80年目の対話

－映像でたどる、日野原重明・命の記憶－

②円卓会議：全国の各会代表が参加、意見交換、交流を図ります

③夕食交流会：参加費（実費8,000円）

「新老人の会」は、2000年の発足当初から全国に支部を設け、最盛期には会員12,000人、46支部を数えるまでになりました。日野原先生がお亡くなりになった後、各支部が独立して活動することになり、現在も21の会が存続しています。

このような「新老人の会」各会が一堂に会して、共に学び合い、意見交換、交流を図ります。

同封のチラシにありますように、講演は、早乙女愛氏に日野原先生の映像を多用してお話いただきます。日野原先生が戦争体験を通して、平和への思いを深く抱いておられたことを、皆さんと分かち合いたいと思います。（参加費無料）

円卓会議の傍聴、夕食交流会への参加も大歓迎です。全国各会からは20名くらいの参加ですが、東京の会の皆様にもぜひご参加いただき、盛り上げていただきたいと思います。



『原爆の図 丸木美術館』 見学会

イベント報告

九月十一日(木)会員十七人で埼玉県東松山市の丸木美術館を訪問。最初に美術館やご夫妻の思いなどを、案内係の方による解説をお聴きしてから絵画を鑑賞したことで、分かりやすくより充実した一日となりました。広島出身の丸木位里氏と妻の俊氏が原爆投下直後の広島へ駆け付け、目にした惨状。その記憶をもとに描き上げた『原爆の図』は、水墨

画家の位里氏と油彩画家の俊氏の共同制作。その大きさと強さが観る者に迫ってきます。私は、描かれている人々が語り継がれている悲惨な姿ではないことに疑問を持っていましたが、それは亡くなった人々の尊厳を守ろうとしたご夫妻の優しさだと知りました。館内には『南京大虐殺の図』『水俣の図』『アウシュビッツの図』など二十世紀の戦争や公害を記録した作品もあり、人間とは何かを深く考えさせられました。位里氏の母、スマさんの「ピカは人が落とさなきゃ落ちてこん」



との言葉。今なお現実に起きている戦争が一日も早く終わるよう祈るばかりです。

上映後、弁護士士の齊藤雅弘さん、映画監督の寺田和弘さん、現地から只野英昭さんが「二度とこのようなことが起こってはならない」「大川小学校が将来の学校防災の礎になってほしい」という熱い思いを語られました。この映画は子供たちの「生きた証」とご遺族の「生きる」意味を取り戻した映画ともいえます。伝えること、知ることの大切さを実感しました。

上映に際し、城西国際大学情報メディア学科の中尾玲一先生と学生さんの全面的なサポートに感謝いたします。尚、お寄せいただいた寄附金六万円は大川小学校遺構修繕費として送らせていただきました。

イベント報告

映画「生きる」自主上映会 大川小学校 津波裁判を闘った人たち

2025年7月27日 日曜日 13時
城西国際大学・東京紀尾井町キャンパス
参加者83名

二〇一一年(平成二十三年)三月十一日に発生した東日本大震災の津波で石巻市立大川小学校の児童七十四名教師十名の命が奪われたことについての裁判のドキュメンタリー映画で、なぜわが子が学校で最期を迎えたのか、十年間にわたりその答えを探して撮影し続けてきた親たちの記録です。仙台高等裁判所が出した答えは「学校が子供のいのちの最期の場所になってはならない」という胸に響く心ある判決でした。

編集後記

戦後80年が経ち、先の戦争を知る人はますます少なくなりました。幸い当会には80歳代後半～90歳代で、戦争体験を執筆していただける方たちがおられます。今回は、そのなかのお三方に、「今、伝えなければ」との思いを込めて、巻頭言と2面の『戦後80年の節目に思う』へのご執筆をお願いしました。

10月11日の「講演とコンサートの集い」(チラシ同封)は、アメリカ生まれの詩人、翻訳家、随筆家と多才なアーサー・ピナード氏の講演、コンサートは、植村理一氏のヴィオラと松田希美氏のピアノのデュオです。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

「新老人の会」東京

2025年(9月現在) 会員数156人(144件)
2024年 会員数220人(188件)

会員募集中!

年会費

個人・家族会員 5,000円
賛助会員 (一口) 10,000円